

# 3.平成11年度に特に注意を要する病害虫

北海道病害虫防除所

## 1.はじめに

北海道病害虫防除所、道立各農業試験場および道農業改良課等で実施した病害虫発生予察事業ならびに試験研究の結果から平成11年度に特に注意すべき病害虫について報告する。

## 2.平成10年度に多発した病害虫

平年に比べてやや多発～多発した病害虫を表1に示した。

## 3.平成10年度に新たに発生または命名された病害虫

病害7種、虫害9種について表2に示した。

## 4.平成11年度に特に注意を要する病害虫

### 1)秋播き小麦の縞萎縮病（発生地域の拡大）

平成3年に発生が確認されて以来、平成9年までに、道南・道東の6支庁管内で発生が認められたが、本年後志管内でも発生が確認され、新たに6市町村で発生が認められた。これにより発生地域は、石狩・渡島・後志・空知・網走・胆振・十勝の7支庁管内18市町村となった。病原ウイルスは糸状菌によって土壌伝搬するため、連作は避け、発生ほ場の土壌の移動を避けるとともに、土壌水分が高いと発病が助長されるので、ほ場の排水を良くし、発病抑制に努めることが重要である。また、発病率が高いほ場では感受性の高い品種の作付を避ける。

### 2)ばれいしょの粉状そうか病

平成10年は、新しいもができる時期から低温で経過し、7月の降雨などで土壌水分が高く保たれたことから、粉状そうか病が多発しやすい条件となり、特に羊蹄山麓で多発生し、かなりの割合が生食用から澱原用になった。本病は排水の悪いほ場で発生が多いことから排水の改善に努めるとともに、病斑のある種いもを使用せず、輪作を実施する。また、発病したほ場では殺菌剤を土壌施用すると効果が認められる。

### 3)メロンのつる割病

平成4年にレース1,2y（黄化型）の発生が確認されて以来、平成9年までに2支庁管内9市町で発生が認められていたが、本年新たに3町で発生が認められた。本レースは現在利用されている抵抗性台木・品種すべてを侵すことが判明している。このため対策としては、健全種子・育苗土の使用、連作の回避、発生地での栽培回避、発病株の早期発見、拔取り焼却処分、作業機等による土壌移動の回避、土壌消毒などがある。

### 4)各種施設栽培作物のミカンキイロアザミウマの発生拡大とTSWV

平成8年に本種の発生が確認されて以来、施設栽培作物において発生が拡大しており、特に種苗類の移動が主要な拡大要因と考えられている。このため、種苗の購入に当たっては、寄生の認められない健全なものを購入するよう努める必要がある。また、発生が認められた場合は、農業改良普及センターや農業試験場と相談し、適切な農薬を選択しローテーション防除を実施することが必要である。農薬の効果では他のアザミウマに効果が高い合成ピレスロイド系やクロロニコチニル系剤の効果が高く、有機リン系やネライストキシン系剤の効果が高いという特徴がある。なお、冬期間にハウスのビニール被覆の排除と寄主植物を処分することは、本種の防除に当たって有効である。

また、本種はトマト黄化えそウイルス（TSWV）を媒介し、ピーマン・トマトなどでは黄化えそ病を引き起こすことから、本ウイルスによる病徴が確認された場合は、上記方法によって虫自体を防除する以外に、保毒源となるハウス内及び周辺の感染作物や各種雑草の除去に努める必要がある。

**5)施設野菜・花きの灰色かび病菌**（ジェットフェンカルブ・チオファネートメチル水和剤に対する耐性菌の出現）

本病菌は耐性菌が発生しやすく、野菜類・花き類でベンズイミダゾール系剤、ジカルボキシイミド系剤の耐性菌の報告があり、豆類でもベンズイミダゾール系剤、ジカルボキシイミド系剤、フルアジナム剤で耐性菌が見られている。

施設栽培では、一度多発すると防除が難しいため発病前から薬剤散布をしており、さらに作期が長いため、散布回数が多くなりがちなことから、新規薬剤でも耐性を獲得しやすい状況にある。

平成10年度、日高支庁管内のトマトのハウスから本病菌を採取し耐性検定を行った結果、一部ハウスで、ジェットフェンカルブ・チオファネートメチル水和剤に対する耐性菌が確認された。また、空知支庁管内のスターチス栽培ハウスでも本剤に対する弱耐性菌が認められており、今のところ防除効果の低下事例は認められていないが、今後の耐性菌密度の増加、発生地域の拡大が懸念される。

以上のことから、今後の防除対策としては、換気、灌水の調節などのハウス管理（耕種的防除）を基本とし、薬剤散布を行う場合は、発生初期に発病を抑えることに重点を置き、同一薬剤を連用せずローテーション散布を行うことが重要である。

表1 平成10年にやや多発～多発した病害虫

作物名	病害虫名
大豆	べと虫、茎疫病
小豆	輪紋病、茎疫病、炭そ病、アブラムシ類、タネバエ
菜豆	灰色かび病、タネバエ
馬鈴しょ	疫病、塊茎腐敗、軟腐病、粉状そうか病、ナストビハムシ
りんご	腐らん病、斑点落葉病
たまねぎ	軟腐病、タマネギバエ
ねぎ	べと病
にんじん	軟腐病
だいこん	ダイコンバエ、キスジトビハムシ
はくさい	白斑病、黒斑病、軟腐病
キャベツ	軟腐病、モンシロチョウ
トマト	灰色かび病
牧草	ウリハムシモドキ

表2 新たに発生または命名された病害虫作物名小豆

作物名	病害虫名(病原菌・害虫の学名)	病徴・加害様相
小豆	根腐病 ( <i>Fusarium solani</i> f.sp. <i>phaseoli</i> )	病害名が正式に決定。病徴等については「平成10年普及奨励ならびに指導参考事項」を参照。病原菌名はいんげんの根腐病と同じだが、本菌のいんげんに対する病原性は弱い。
ささげ	マメノメイガ ( <i>Maruca testulalis</i> )	成熟近い若莢の内部に食入し、食入痕からは虫糞が排出される。
ねぎ	白かび腐敗病 ( <i>Botrytis porri</i> )	葉身に径5mm程度の白斑が散見、葉鞘部が外葉から淡褐色水浸状に腐敗し葉先から枯れ込む。重症株では葉鞘の外葉が腐敗し、胴割れ症状を呈して内葉が突出し、葉鞘の内側には灰白色の菌糸が密生。
トマト さやえんどう ねぎ	ミカンキイロアザミウマ ( <i>Frankliniella occidentalis</i> )	トマト、サヤエンドウでは果実に白ぶくれ症状(ヒラズハナアザミウマの被害と同症状)。ねぎでは白いかすり状斑点。ネギアザミウマと同症状であるが、葉の上部から被害が発生する。
トマト	黄化えそ病(TSWV)	生長点から黄化。黄化した葉では黄色の輪紋が認められ、えそが生じる。やがて葉は巻き上がり、茎にもえそ条斑が認められるようになり、生育は停滞。果実では緑色の濃淡部やえそが生じる。ミカンキイロアザミウマにより伝播。
ごぼう	黒条病 ( <i>Itersonilia perplexans</i> )	病原菌が同定された。病徴等については「昭和63年普及奨励ならびに指導参考事項」を参照。
ゴボウアザミ (ヤマゴボウ)	半身萎ちょう病 ( <i>Verticillium dahliae</i> )	収穫した根部に中心柱が褐変する黒芯症状。
きく	えそ病(TSWV)	葉に退緑した輪紋症状。葉では上葉に退緑輪紋が多く認められるが、下葉ではV字に切れ込んだ退緑やえそが生じる場合がある。ミカンキイロアザミウマにより伝播。
コスモス	白斑病 ( <i>Entyloma</i> sp.)	葉に白斑症状。はじめ葉に淡黄色の小斑点が形成され、のちに円形で3~5mmの白色病斑。病斑は融合し葉全体を覆い、やがて葉が褐色に腐敗・枯死。
カーネーション	クローバシストセンチュウ ( <i>Heterodera trifolii</i> )	草丈が低く、株全体のしおれや葉の巻き上がり、着蕾の遅れなどをともなった生育不良症状を呈する。被害株の根には多数のシストセンチュウ雌成虫やシストの着生が肉眼観察される。
りんどう	アカスジキイロハマキ ( <i>Clepsis pallidana</i> ) ウスアトキハマキ ( <i>Archips semistructus</i> )	幼虫は葉を綴り合わせて、その中で葉を食害する。被害は生長点付近に多く、摘芯後の被害は商品価値を全く失う。
デルフィニウム	チャノホコリダニ ( <i>Polyphagotarsonemus latus</i> ) オンシツケナガコナダニ ( <i>Tyrophagus neiswanderi</i> )	新葉に好んで寄生して吸汁加害し、葉先が巻いたり、葉裏に褐点を生じる。また、花蕾に寄生して褐変症状を呈する。
ぶどう	ツマグロアオメクラガメ ( <i>Lygocoris spinolae</i> )	幼虫が新梢の発芽直後の未展開葉を吸汁加害するため、新葉には黒褐色の斑点が生じる。葉の伸長展開にともなって、吸汁加害部から不規則に裂ける。

セイヨウスモモ (プルーン)	スモモヒメシクイガ ( <i>Grapholita dimorpha</i> )	ふ化幼虫は果実に侵入して内部を食害し、食入部から糞塊を排出する。老熟幼虫は被害果実の表面にまゆを作る。
-------------------	---	---

[目次へ戻る](#)